

第3の起業家—大学の先生とベンチャー企業—

神戸大学経済経営研究所
講師 上野正樹

経済産業省の調査によると 2003 年度までに設立された大学発ベンチャーは累計で 799 社。1999 年度までに 260 社、2001 年度までに 384 社であったことを考えると急増している。これら大学発ベンチャーの事業分野は、IT、バイオ、機械・装置、素材分野が中心である。特にバイオが増加傾向にあり、2003 年度には全体の 37%を占める（以上は経済産業省大学連携推進課「平成 15 年度大学発ベンチャーに関する基礎調査」にもとづく）。従来、ベンチャーの起業家といえば、企業をスピンアウトした人材や、学生が中心であった。ここに大学の研究者が加わろうとしているのである。

もっとも大学発ベンチャーには学生によって起業されたものも含まれている。最近の私達のアンケート調査によると、大学関係者の起業時の地位は、回答企業 154 社中 57%が教員である。教員のうち 7 割が教授である。また起業目的としては、「技術の実用化」42%、「社会貢献」23%、「ビジネスアイデアの商業化」21%となっている。現在の事業形態として、商業化に向けた開発段階にとどまっている企業が 3 分の 1 を占める。そして、株式公開（IPO）の予定については、「IPO はしないで安定成長をめざす」とする企業が 34%ともっとも多く、次いで「10 年以内をめざす」とする企業が 26%となっている。

大学発ベンチャーの多くは理工系の研究成果を経営資源にしている。そこには技術の実用化や社会貢献を目的とした大学の先生がいる。なお教員による起業の場合、民間出身のパートナーと組むパターンが多い。起業家といえば貪欲に事業に取り組む人々をイメージするが、起業目的として社会貢献という回答が比較的に目立つ。そして、アーリーステージからアグレッシブに成長を目指すベンチャーは少ない。安定志向である。

現状の大学発ベンチャーは、大学での研究開発をサポートするタイプの企業が多い。最近ではベンチャーが研究資金の調達ルートの一つになっている。特に理工系分野の研究になると多くの資金を必要とする。産学連携ブームの中、研究を維持するためにも前に出ざるを得ない先生がいるのも事実である。仕方なしの起業とでも言えようか。そして、大学の先生に企業経営は無理、経済活性化のためにはベンチャーよりも中小企業を支援すべきだという意見も聞こえてくる。大学発ベンチャーはこうしたレベルの位置づけにとどまっている。

大学発ベンチャーの先進国アメリカでは、大企業へと成長した大学発ベンチャーがハイテク分野に数多く存在する。バイオではジェネンティック、バイオジェン、IT ではヒューレットパッカード、シリコングラフィックス、シスコシステムズ、クアルコムなどが有名だ。こうした企業を生み出す背景には、伝統的に産業界とのリンケージ（あるいは分業関係）を築いてきた大学研究システムの存在がある。そこにはたとえば、ビジネスシーズを得るために大学に行って研究をするといった循環がある。

ここではまず、大学発ベンチャーの創出メリットを2点指摘しておきたい。第1に研究の活性化手段としての大学発ベンチャーである。研究成果の活用方法として、従来からの学術貢献以外に、起業や民間への技術移転もあれば、そこから多様なフィードバックを得られるだろう。第2に新技術の創出や実用化、長期的には雇用拡大の一つの方法としての大学発ベンチャーである。特に不確実性が高く、大企業にはリスクを負担できないハイテク分野での貢献が期待される。ただしこのメリットを得るためには、ある程度の成長意欲のあるベンチャーが必要だろう。

一方、産学連携やベンチャーのブームは、大学が社会の中で持つ役割に問題を引き起こす可能性がある。第1に研究分野の偏在化の問題である。大学では、民間企業には実施できない、理論的、哲学的な研究もおこなわれている。多くの研究が実用化志向に流れて、こうした分野が手薄になっては困る。第2に大学本業の機能不全である。たとえば、起業を急ぐあまり、探索余地の多く残された基礎研究成果を特許などで囲い込むと、オープンな研究競争が阻害されてしまう。またベンチャーとの兼業で、本業の研究教育に手が回らなくなるような状況は避けなければならない。

日本では、大学発ベンチャーを創出すればよいという段階から次の段階へ移る時期に来ている。今後は、技術的、経済的に意味のあるベンチャーの創出に向けて、大学研究システムあるいは国のイノベーション能力という観点からの議論もしていく必要があるだろう。ともあれ、ビジネスの厳しい規律を知っている人材、馬力のある学生、そして先端的な研究を進めている大学の先生が起業家予備軍としてそろってきた。将来的にはこれらの人々が組んで事業を行なうことも増えるだろう。その時どのような企業や新技術が出てくるのだろうか。今から楽しみである。